

⑨不服申し立て以降の市とのやりとりについて

(機関紙2025/3月号掲載済)

今回の処分について、我々はさいたま市との話し合い、また市からの申し入れに従って事務手続きを進めていたのに、我々が一方的に悪いことをした、ということを前提にしているため、大いに憤っているというのはこの処分があった時から表明しています。当初の市の記者会見においても、そうした形で市は一方的に我々を悪者にする形での発表を行いました。

これら細かい内容については、前に出した文章を読んで下さい。

市は我々の状況を把握してたにもかかわらず、黙認してきたこと、これは事実です。

監査や市との協議の際に、我々は状況をつまびらかに説明してきたのです。

また、数年前の市とのやりとりの中で、交換条件のように「資格の取得」が出てきたコトからも、市がそれをまったく知らなかったとするのは事実ではありません。

そして、それを急に梯子を外される形での処分。

市は信義則に反していると考えています。

また、そもそも市の決定がなければ時間数増をこちらから一方的に請求することは出来ないシステムになっています。

一方的に我々が時間増を請求したかのような発表についてはそもそも無理があります。

これらについても過去の文章を読んでいたいただきたいところです。

結果的に「法を犯した」というのであれば、それはそれで処分を受けざるをえないのかもしれない。

しかし、市とのやりとりの中でそうした事務手続きを進めてきたのです。

そのことを一方的に悪者にされたままの処分には納得がいきません。

福祉とは、各々違ったニーズに合わせて適切な援助が成されなければなりません。

その中で、法の弾力運用もあるかと思えます。

それは個々との話し合いだったり、団体との話し合いだったりという形で、よりその当事者にあった形の援助を作っていく、という流れで作られていきます。

しかしそうした、それまでの経緯をまったく無視し、当事者側が一方的に悪いことをした、という処分になってしまふのだとしたら、そもそも個々がニーズを訴えることすら難しくなってしまう。

当事者も、そして市の現場も萎縮してしまうでしょう。

市には、事実関係をしっかりと明らかにし、結果として個々のニーズにこたえることを諦めないでもらいたいと思います。

この件について、我々は処分に対して不服申し立て(審査請求)をしてきました。

それに対し、市からは弁明書が送られてきますが、我々が指摘してい

る「黙認してきた事実」については答えていません。

信義則に反する、とする我々の立場としては、その部分にしっかりと向き合って欲しいのですが、それに市は触れてきません。

そして大量の文書を送ってきたりして、正直、これは「こちらが根負けするのを待っているのではないか？」とさえ思えます。

確かに、行政内部の事実関係を明らかにしたい、という市民側の立場は弱いですが。

こうした申し立てをすることすら勇気が必要です。

処分を受け入れて、もうこの不毛なやりとりをやめよう、とすら考えよう。

ましてやこの先に裁判、なんてことになったら、それはもう腰が引けてしまう。

でも、市がこちらが質問するコトに答えない、言葉は悪いですが「はぐらかしている」、という状況で、このままこちらが根負けしてしまつたら、やはりそれは福祉の後退を生むと思えます。

市には、しっかりと過去の我々とのやりとりを明らかにしてもらいたい。

そのことが、障害者福祉は各々違ったニーズにこたえるものである、との原点に立ち返って福祉施策を進めていく上で必要なのではないかと考えています。

「この法律しかありませんから、あなたはこの法律通りの生活をして下さい。外出は年度当初に計画して下さい。そうすれば加算が受けら

れます(ベースの介助料が少ない中、加算がなければ介助者の給与はますます減ってしまいます)」なんてことは、やはり「障害があるうがなからうが、誰もが豊かに生活できる」ことからは外れています。

ノーマライゼーションを謳うさいたま市がそうした対応をしていいとは思いません。

当事者個々との話し合い、当事者が集まる団体との話し合い、そうしたことを大切にして、一人一人が豊かに、さいたま市に暮らしてよかったと思えるような福祉施策を我々は期待しています。

そうしたことを我々とずつとしてきたじゃないですか。

それを今になってひっくり返されていることに我々は憤っているし、その先の「話し合いをしない」「こちらの質問に答えない」という福祉行政になっていってしまうことが恐ろしくもあります。

加えて、不服申し立てを、処分を下した市に対しておこなう、というシステムもどうなんでしょう？第三者が改めて判断する、ということが必要だとも思えます。

じゃなければ、なかなか市だって一度決めた処分をひっくり返すことは難しいのではないかと。

都合の悪いことには答えず、こちらが根負けすることをまっとうしているかのように思えます。(介助派遣システム)